

The Story of
邪悪にして悪辣なる
地下帝国物語

Evil and Unscrupulous Underground Empire

Hideki Uryu
雨竜秀樹

5

Main Characters
主な登場人物

ギールイル・
ギールガシア・
ギーストリア

モニカ

勇者をも翻弄する力を持つ
謎の凄腕女盗賊。
迷宮の秘密を仄めかすが……!?

メルフェンス

魔法帝国を滅亡に導いた王弟。
裏切り者として、
地下帝国から追われている。

アルアーク・アベル・
アルティムア

滅亡した魔法帝国の皇子。
妹とともに、地下迷宮の化身となり、
侵略国への復讐を企む。

ハルヴァー・アベル・
アルティムア

アルアークの妹。絶大な魔力を持つ、
地下迷宮の支配者の一人。
兄を狂信的に崇拝している。

テルキス

地下帝国の重鎮達

テオドール・ピロスト

セレンディアス・ルフエストニウム

聖神教会に反抗する黒い勇者、
通称：セレス。
女盗賊モニカと共に
地下帝国に加担する。

カルテン・ミーラカディア

聖王国が誇る最強の勇者。
地下帝国に堕ちた
勇者カイルに戦いを挑む。

カイル・ランフレア

ルガル

シア

グラッド

プロローグ

邪悪にして悪辣なる地下迷宮から少し離れた場所にある廃屋。

それは女勇者セレスが所持する隠れ家の一つで、彼女は以前、そこにホブゴブリンのガースを連れてきて匿ったことがある。そして今は、相棒のモニカと二人で身を潜めていた。彼女達は地下迷宮攻略に失敗したため、再挑戦の機会を狙いつつ対策を練っているのだ。

「なるほどくそっかあ……」

モニカは難しい顔で「地下迷宮の書」を見て咥く。その本は地下迷宮の状況を現在進行形で記録し続ける魔法の書物だった。地下帝国の支配者であるアルアークとハルヴァアの記憶が刻まれているため、この本を持つ者には地下迷宮の様子が手に取るようにわかるのである。

「どうした？」

セレスは干し葡萄を皿に盛りながら訊いた。

「地下帝国の動きが活性化しようなんスよ。たぶん、敵側の残存勢力を一気に滅ぼそうとしてい

るんじゃないでしょうか？ それはつまり、世界の終わりが近づいているってことですよ」

それからモニカは「あ、少し貰いますね」と言っ、て、干し葡萄に手を伸ばしたが、セレスはひょいっと皿をひっこめてしまった。

「あれからだいぶ時間が経つが、向こうはお前の存在を覚えているだろうか？」

「あたしのことを覚えているかどうかはわかりませんが、セレスさんが侵入した件は記憶に新しいでしょうね。忘れちゃくれませんよ。それに、前回通ったルートは、ユニーク・モンスターや感知系トラップが敷き詰められているス。発見されずに、最奥まで向かうのは無理ですね」

モニカは再度、干し葡萄を奪おうと手を伸ばすが、セレスはまたしても皿を引いた。

「そうか、困ったな」

女勇者はそうぼやくつつ、干し葡萄を口の中に放り込んだ。

「つて、セレスさん！ 意地悪しないで、一掴みくらいくださいよお」

「家主よりも先に食べるんじゃないか」

「そりゃ失礼しました。でも、セレスさんは食べ物を食べる必要のない体ですよ？ だったら、今にも飢えて死にそうな自分を優先してくれてもいいと思うんですよ」

モニカは飛び撥ねた髪の毛を垂らしながら抗議の声を上げ、ついでに、ぐうぐうとお腹を鳴らした。

「チツ、じゃあ一掴みだけだぞ」

その言葉を聞き、モニカは「わかりました」と頷きながらも、皿の干し葡萄をすべて一呑みにしてしまった。

「ごっくん」

モニカは、さながら蛇が卵を呑み込むように喉を鳴らした。

それを見て、セレスの左右色違いの瞳に、一瞬だけ憎悪の炎が宿る。

「……何か言い残すことはあるか？」

だが、モニカは意に介さず、「んゝ、もう少し味わって食べたかったス」などと言っている。さすがにセレスも怒りを収め「そういえば」とモニカに向き直った。

「ついさっき、なんて言った？」

「『もう少し味わって食べたかったス』って。あ、ひょっとして、もう一袋あるんスか？」

「ねえよ！ じゃなくって、地下迷宮の支配者達の動きが活発になったとか、なにやら動きがおかしいとか何とか言っ、てなかったか」

セレスはそのことに考えが及んだとたん、頭の中がぐちゃぐちゃになって整理がつかないような歯がゆさを痛感した。

と、そこへモニカが言う。

「動きがおかしいって言っても、考えてみれば別におかしくはないですよ？ 地上での戦いにおいて、地下帝国は大きな勝利を収めました。だから今こそ、大陸全土を一気に征服する好機到来なんですからね」

「あいつらが王なら、そう考えるだろう。だけど、あいつらは王じゃない。復讐者だ。大陸全土を支配することになど、たいして興味はないはずだ」

地下迷宮で戦った時、セレスは彼らの体から溢れる怨念おんねんを肌で感じた。だからこそ彼らはほとんどすべての国々に喧嘩を売るような無茶をしているし、終わった後のことなど考えていないはずである。

復讐は信じられないほどの力を発揮するが、同時に終わった後には何も残らない。

事実、モニカから聞かされた未来は、最終的に世界規模で何も残らぬ不毛の地となっている。

「そのことは、あいつら自身も言っていただろ？」

—— 邪悪であるとして押し込めたものを、世界に広げる。

妖魔を嫌悪する人間達の世界を、妖魔によって統治された世界に。闇に恐怖する者達には、闇が手を振って生きる世界を。つまり、聖神教会の教えに染まった世界が崩れ去ることこそが、彼らにとつての復讐である。そしてそれは、おそらくは、もっと時間をかけて行われる予定であったはずだ。

「一気に領土を奪い取るなんて、あいつらのやり方ではないし好みでもない。だが、あえてそれを行おうとしているとすれば」

セレスはまるで長年の友人であるかのように、地下帝国の兄妹の心を読み解といていく。

モニカは不思議そうに首を傾かげた。

「セレスさん、どうしてあの二人のことがそこまでわかるスカ？」

「悪人は悪人を知るってな。お前が未来から来なかったら、俺様……、おっと、わたくし様がどっちの陣営についていたと思うんだ？」

セレスは獣のような笑えみを浮かべた。

セレスもまた、聖王国が滅びることを求め、そして既存きそんの秩序が崩壊することを望み、さらには世界が乱れることを願う異端いたんの勇者である。少なくともモニカの知る歴史において、セレスは地下迷宮の支配者達に協力して、聖王国と戦った人間だった。いや、モニカがこの時代に来た時点でも、すでに聖王国と敵対していた。

そのような人間ならば、なるほど地下迷宮の支配者であるアルークとハルヴァーの気持ちが少しはわかるのかもしれない。

「まあ、信じることにするっす。でもそれって、今さっき言ったセレスさんの推測と矛盾むじはんしますよね？ 復讐を長く続けたいのならば、聖王国と一気に決着をつけるのはおかしいスよ」

「ああ、だから前提が間違っているのかもしれない」

「ふむ？」

モニカは曖昧な返事をする。

「チッ、人の話をわかっていないのに、わかったような返事をするんじゃないねエ」

「えへへ、ばれましたか？　つか、セレスさんの言い方回りくどいんですよ。もっと噛み砕いて言ってください」

「悪かったな、頭の中でまだ整理できていないんだよ。えーっと、アルアークとハルヴァーは王ではないと言ったが、そこに誤りがあるのかもしれない。良くも悪くも国を治める者は国の存続を願うはずだ。兄妹が暴君や狂王の類でも、彼らなりに国を残そうと考えているとしたらどうだ？」

セレスはあまり確信がなさそうに言った。

「そう考えると二人の性急な行動もある程度納得がいく。それは、モニカが話した内容を覚えていくからだろう。地下迷宮の支配者には真実を看破する力があるから、虚偽でないことはわかったはず。となると、これから先、自分達が行き着く未来の果ても見えたはずだ。……もしかすると、だから、未来を変える決意を固めたのか？」

「いや、その程度では未来は変わらないスよ」

モニカの知るところによれば、兄妹の復讐が果たされた瞬間に、地下迷宮を支えていた魔力が暴

走するはずだ。

そして、そんな未来を回避する手立てはまだ打たれていない。

その証拠に、未来から来た人間である自分がまだ存在している、とモニカは言う。

しかし、セレスはモニカを無視して言葉を続けた。

「だが当然、あの二人は復讐を諦めていない。ここで一気に動くとするれば、復讐の方法を変えたからか？　いいや、変えてはいないはずだ。だが、ならばどうやって復讐を果たすつもりだ？」

最後の方は説明というよりも、自問自答のようであった。

モニカはその問いに答えることはできなかった。

地下迷宮の奥底では、三人の王の悲鳴が響き渡っていた。

そのうちの一人、ロナン国王フェルセネクは、愛する妻子に弔り殺しにされている最中だった。

ベティア皇帝ゲッエンベルグは豚の姿に変えられ、鉱山でこき使われている。

聖王イル九世はすでに蟲に食い殺された。だが、その魂はバラバラに引き裂かれて、名だたる魔王や邪神の供物となっている。死後も苦しみ、慈悲を求め続けるその声は、「多額の魔王」と呼ばれる特殊な施設から絶えることなく漏れ響いていた。

恐怖。絶望。諦観。後悔。狂乱。苦痛。怨嗟。様々な感情が入り混じった嘆きの声を聞きながら、

アルアークとハルヴァーの魂は震えるほどの喜びを感じていた。しかし、いつまでも快樂に浸っているわけにもいかない。

邪悪なる兄妹は王座に腰掛け、円卓の上に広げた地図に目を向ける。

地図の中央部分は黒い駒で制圧されていた。

白い駒が残っているのは、僅か三カ所だけである。

その三カ所とは――。

聖王国と連合諸国を陰で支援していた商業国家キレトス。

魔法帝国を裏切った貴族達作り上げた新生魔法帝国。

そして大本命である聖神教会の長――教皇が支配する聖王国。

密偵から入手した情報によれば、商業国家キレトスの大商人達はこの大陸から脱出しようと画策しているという。聖王国と連合諸国が敗れた今、大商人達は私財を抱えて別大陸に逃れようというわけだ。

海の外にある大陸に逃れられたら、もう手が出せない。

地下帝国に海軍は存在しないからである。

地下迷宮を司るアルアークとハルヴァーの権能をもつてしても、大地から離れた場所にはその力は及ばない。

「そろそろ、プルック達が次の標的に喰らいついた頃だろうか？」

「うん、兄様！」

「フラウスとアリストは？」

「予定通り、援護に回っているみたい」

勝利するだけならば、妖魔の軍勢だけで十分だった。だが、敵を一人も逃がしたくないのなら、いささか戦力不足である。

ハルヴァーは妖魔の駒の隣に、吸血鬼の駒と合成魔獣の駒を置いた。

それらは「十貴族」――魔法帝国の重鎮たる貴族を意味する駒であり、やがて時が来るまではと伏せておいた大駒だった。

「よろしい」

「裏切者達には、ウィンスと爺が対応しているから問題ないよね」

最終決戦が近づいた今、出し惜しみは不要とばかりに最強の臣下を投入していた。

彼らは魔法帝国の残党であり、アルアークとハルヴァーの同志だった。きっと兄妹が満足する方法で、祖国を裏切った子どもを血祭りに上げてくれることだろう。

「そして、二つの国を平らげた後は」

「教皇の君臨する聖都を攻略する」

それが、アルアークとハルヴァアの望む復讐の終着点だ。

「聖都を落とす役目は貴公に任せる」

「堕ちたる勇者カイル・ランフレアに」

という言葉葉を合図に、主人に忠誠を誓った一人の青年が一步進み出て、彼らの眼前に控えた。女性のように美しい顔立ちをしている。

地下迷宮に挑んだ末、敗北し、闇に堕ちた勇者だが、そんな彼に与えられたのは、愛する恋人達との肉欲に溺れる酒池肉林の日々だった。今や身も心も地下迷宮に属することになった勇者は、アルアークとハルヴァアを前に片膝をつき、恭しく頭を垂れている。

「聖王国の勇者カルテンを必ず仕留めよ」

「私達の憎しみを、君に預ける」

支配者から命を受け、勇者カイルは歓喜に身を震わせる。

「仰せのままに、我が主」

アルアークとハルヴァアは満足そうに頷くと、勇者のほかにもう一人、信頼する少女の名を呼んだ。

「シア」

「来なさい」

黒髪の少女シアは前に進み出て、カイルと同じように跪く。

地下迷宮が生み出されてから何度も前線で戦ってきたこの少女を、兄妹は深く信頼していた。

「特別な役目を授ける」

「シアちゃんにしか頼めないことだよ」

心をくすぐるような言葉を目にして、シアは「なんなりと、お命じください」と言った。

そのどんよりとした金色の瞳には、期待の色が宿っている。

アルアークとハルヴァアは少女に、自分達の「計画」を詳細にわたって言い聞かせた。最初はただ黙って聞くだけだったシアも、話の全体像が見えてくるにつれ、体を小刻みに震わせる。

それは喜びではなく恐怖の故であった。

「……話は以上だ」

「できるよね？」

と主は念を押すが、シアは首を左右に振った。

「いや、嫌です」

シアはきつぱりと否定の言葉をおくにした。

アルアークとハルヴァアの命令ならば、たとえどのようなことでも喜んで従うつもりだったが、こればかりは頷けない。シアの隣でアルアークとハルヴァアの命令を聞いていたカイルも、思わず

反論してしまう。

「陛下、考え直してはいただけないでしょうか？」

カイルもシアと同じ気持ちなのだ。

先ほど兄妹が打ち明けた「計画」は、墮ちた勇者にとっても、とても許容できるものではなかった。

「地下帝国の支配者がそのようなお気持ちでは、我々は何のために戦うのかわかりません！」

カイルは思わず声を荒らげる。

だが、アルアークとハルヴァーは全く動じない。

「すべては私達の復讐のためだ」

「そして、君達のためでもある」

地下迷宮の支配者は頑として譲らない。

この地下迷宮を創造する以前から、心はすでに決まっていたのだ。

「あらゆる者に運命がある。誰もそこから逃れられない。兄様も、私も、逃れることはできないのだ。仮にシアちゃんが私達の命令に従わなかったとしても、そのことは変わらない。いや、むしろ悪い方向に向かうかもしれない」

とハルヴァーは、聞き分けのない子供をあやすように、優しく告げた。

「ほかに方法はないのでしょうか？」

沈黙するほかないシアに代わって、カイルが問いかける。

主がどう答えるかわかつてはいたが、問わずにはいられない。

果たして、その予想通りの答えをアルアークが告げた。

「ない」

アルアークは氷のような表情のまま、短くキツパリと断じた。

カイルは何とかして主人を説得したかった。

だが、アルアークの深い蒼色の瞳を見ると、たとえ百万の言葉を並べたとしても、主人の意志は揺るがないと悟った。

泥のように淀んだ怨念を振り払うことはできないのだ、と。

カイルが地下迷宮に挑み、敗れた瞬間に、こうなることは決定づけられていた。

そしてそれは、シアにとっても同じである。悪魔を身に宿すことにより命を長らえた少女が、恩人の意志に背くことなどできようはずがない。

「仕方がないよね。ね、兄様」

ハルヴァーはいつも通りの邪悪な笑みを浮かべている。

兄妹の望みは、最初からただ一つであり、それ以外のものは、必要とあれば容赦なく捨てる覚悟

なのだ。

「時が来たなら、我らの言った通りに動くが良い」

「それが君達自身のためでもある」

そこでシアは囁くように問う。

「それがお望みなのですか？」

地下迷宮の支配者達は頷いた。

シアは、それ以上は何も言えず平伏した。

第一章 地下帝国と商業国家

地平線の向こうに太陽が昇る。

夜明けの光を浴びながら、妖魔達の大軍団が天幕から這い出てきた。

最大の要害であった城塞都市リゼンベルクを陥落し、聖王国と連合諸国の軍勢を打ち破った妖魔達である。彼らは今、商業国家キレトスに向かって歩を進める旅の途上にあった。

地下通路を進めばすぐに商業国家に到着するのだが、ロナン王国とベティア帝国の残党を狩る必要があるため、地上を行軍していた。

地下からの奇襲を得意とする彼らが、こうして地上を行軍しても、邪魔するような軍隊はいない。正面から戦いに臨む力がある勢力といえば、今やもう聖王国しかない。その上、別部隊が聖王国に睨みを利かせているので、彼らは大手を振って大地を歩けるのである。

人に忌み嫌われ、追われる立場だった妖魔達も、今や彼らこそ地上の支配者と言って差し支えない状況になった。

それというのもすべては地下帝国の支配者であるアルアークとハルヴァーの援助あってのことだ。

一番にアルアークとハルヴァーに忠誠を誓ったゴブリンのプルックは、ゴブリンだけではなく、ホブゴブリンやレッドキャップ、ボガード、バグベア、ヴァルデフラウ、ブラックアニスといったゴブリンの亜種をはじめ、オーク、オーガ、ミノタウロス、サイクロプスなど、多種多様な妖魔の王として君臨している。

「何とも贅沢な乗り物だ」

ベティア帝国軍の戦闘馬車を真似て作った狼戦闘車の中で、プルックはそう呟いた。

数頭の魔狼に牽引される狼戦闘車には、アルアークの配下である魔法使い達が強力な守りの魔法をかけている。これなら、たとえ巨人が踏み潰そうとしてもビクともしないだろうし、竜が炎を吹きかけたとしても焦げ跡一つ付かないだろう。

「ギギ、親父殿、相応しい、馬車、思う」

護衛として同乗しているプルックの息子、悪徳の“ガラグは、思ったことをそのまま口に出す。

ガラグはゴブリンの変異種レッドキャップの部隊を率いている大隊長である。悪魔と取引きして得た「悪徳の刃」を持っており、頭は悪いが腕は立つ。

「一族、繁栄、これから、俺達の時代」

ガラグの言う通り、地下迷宮から溢れ出た妖魔達が今や大手を振って地上をのし歩いている。今この大陸に、プルック率いる大軍団を阻める者など誰もいない。

頭ではそう理解しているが、プルックは慎重であった。

「あるあーく様とはるヴあー様の命令ではあるが、必要以上に血は流したくないな」

「ギギ、大商人、あるあーく様、はるヴあー様、故郷焼いた」

「わかっている。だから、俺達はこうして軍を動かしているんだ。あの方々のために、大商人どもを捕らえる。しかし、必要以上に血を流せば、また新たに復讐者が現れる」

聖王国やロナン王国、ベティア帝国などは妖魔を過度に迫害しているため、滅ぼす必要がある。妖魔迫害を裏から支援している商業国家キレストスも同罪。だが、人間すべてを根絶やしにすることはできないだろう。

そこまで手を広げれば、今度は地下帝国に恨みを持つ者によって火の手が上がり、アルアークやハルヴァーと同じく、復讐的だとされるに違いない。

（特に商業国家は大陸各地に食糧を届けてもいる。その都市が潰れ、商人が悉く死んでしまえば、何百万、何千万もの人々が飢え死にするだろう）

プルックはそんなことを考えながら、大地を埋め尽くさんばかりの我が軍勢を見た。この軍勢の糧食を賄っているのは、商業国家の商人達とパイプを持つアルアークの友人である闇商人テオドルなのだ。彼は商業国家の商人とは別ルートの人脈を持つてはいるものの、食糧調達の占める割合を考慮すれば、商業国家の存在は決して無視できない。

つまり、もしも商業国家がなくなれば、軍勢を養う食糧の不足によって妖魔達は互いに殺し合い、仲間の血肉を食うことになるだろう。いや、そうなる前に、無軌道に村落を襲うに違いない。そうなれば、妖魔の大軍団は烏合の衆と化し、今のようないきさな行軍は不可能だ。

(そもそも、人間どもが大人しく飢え死にするだろうか?)

ブルックはゴ布林族特有の臆病さを發揮して、さらに想像力を掻き立てた。

商業国家を攻め滅ぼし、その影響で各地に食糧が届かなくなつたなら、村人達はどうするだろう。飢えて死ぬくらいならばいっそ、と武器を手に取り、妖魔の補給部隊を襲撃するかもしれない。そうなたたとして、妖魔の大軍団はどうすれば良いか。数多の冒険者を葬ってきた地下迷宮に逃げ込めば、犠牲を減らすことはできる。

しかし、それでは今までと何も変わりがない。

(やはり、商人どもを皆殺しにするのは下策だな)

ブルックは何度も考えた末に、そう結論を下した。

ロナン王国やベティア帝国の、王や貴族、騎士達を殺すのとはわけが違うのだ。彼ら支配者階級がいなくなつたとしても、人間すべてが武器を持って立ち上がったりはしないだろうから。

だが、商人達が壊滅し、食糧の補給が断たれたら、人々は善悪正邪など関係なく、ただ生きるという本能に従い、武器を持つて妖魔を追ひ立てるだろう。

「おい、誰か!」

ブルックはこの考えを伝えようと、外を走る狼騎兵を呼んだ。

するとすぐに、ブルックの息子の一人で狼騎兵隊長「狼乗り」であるグラッドが駆けつけた。

「親父殿、どうしました?」

「あるあーく様とはるヴあー様に伝言を頼みたい」

ブルックが言伝を口にするのと、グラッドはその場で覚え込んだ。グラッドはゴ布林の中でも抜きん出て頭が良く、機転も利く。グラッドは「では、忘れぬうちに」とすぐさま地下迷宮へ向かう。

「手紙が書ければ、なお良かったんだがなあ」

立ち去る息子を見送りながら、ブルックはぼやいた。

これだけいろいろと知恵を巡らせることができるのに、ゴ布林の彼は文字が書けないのである。ブルックは、この遠征が終わつたら文字の勉強をしようと心に決めた。

* * *

商業国家キレトスの首都アルナスタリアム。

別名、黄金都市。大陸各地の商人はもちろんのこと、遙か西方にあるコンロンやアマツといった

別大陸からも商人達が訪れる大陸最大の貿易都市である。

ほかの都市のように城壁などは作られていなかった。その代わりに市街には数百もの運河が設けられており、その流れはサフエア海に面する港町カルカナまで伸びている。つまり、この複雑に入り組んだ内陸運河の迷路が外敵の侵入を阻む壁となっているのだ。

仮に地下通路を作ったとしても、海水が押し寄せてくることは明白だった。

そのため、地下帝国の得意とする地下からの奇襲は行えない。首都に足を踏み入れ、大商人の館が建ち並ぶ高級住宅街へ辿り着くには、相当の時間と犠牲を覚悟しなければならぬ。

だが今の地下帝国には、犠牲を覚悟すれば押し切れるだけの兵の数があった。

そして、それは相手側にも伝わっている。

地平を埋め尽くさんばかりの地下帝国の軍勢に対処するため、この首都の運営管理にあたる五十人以上もの商人達が一堂に会していた。

その会議室に食事や酒が運ばれてくるが、誰一人として口をつけようとしない。部屋のど真ん中で、二人の商人が言い争っているからだ。

「この地で守りを固めれば、いずれ聖王国の軍勢が来てくれる。今は我慢のしどころです」

そう主張しているのはアルムという名の年若い男だった。魔法帝国との戦争時に、若くして財を成した人物であり、『蛇の舌』という異名を持つ若手代表の大商人として知られている。

商業国家キレトスでは、一定以上の財力を有する商人を大商人と呼んでおり、他国でいうところの国王に匹敵する権力が与えられていた。

しかし、その大商人は一人ではない。

アルムが言い争っている相手もまた、大商人の一人だった。

古今東西、権力者というものは自分と同等の力を持つ相手を疎むものである。地下帝国の兄妹のように互いを尊重する例は非常に稀で、こういった光景の方が普通なのだ。

キレトスにはほかにも何人か大商人がいるが、彼らは黙したまま、どちらに付けば自分にとって有利か見極めようとしていた。

アルムの論争相手の主張は、こうだった。

「いやいや、アルム大商人。先の戦では聖王が亡くなられているのですぞ。それに、再び軍備を整えるまで、どれだけ時間がかかるかわからん。資金を持って別大陸に移住する方が良い」

白い髭を蓄えた老人——大商人の一人エルギスがそう言うのと、それを援護するように別の商人も意見を述べる。

「エルギス老師の言う通りだ。幸い、港町カルカナまでの運河はまだ押さえられていない。一刻も早く大陸を脱出するべきだ」

周囲から「そうだ」「その方がいい」と、賛成の声が上がった。

若手のアルムに対して、エルギスは古株で、代々大商人を輩出している家の出である。年齢もアルムの倍以上だ。エルギスは以前からこの若者のことを苦々しく思っており、機会があれば一言物申してやろうと狙っていた。

しかし、アルムは譲らない。

「我らだけならば、別大陸に脱出することもできるでしょう。ですが、この黄金都市アルナスタリウムには、大陸各地に荷を運ぶ役目を負った商人達が何万人といえるのですよ？ 彼らを見捨てていくおつもりですか？」

大海を渡れる船の数は限られており、すべての商人を乗せることは不可能だ。

「船に乗せるに値する財力がない者は置いて行く。この非常時に、自分が生き残れるだけの財を蓄えることができなかった者達だ。自業自得と思って、諦めてもらうより仕方があるまい」

エルギスはバツサリと切り捨てる。

その後、さすがに言いすぎたと思ったのか、自己弁護をするように付け加えた。

「仮に我らがこの地に残っても、皆死ぬだけだ」

だが、アルムも食い下がる。

「いいえ、我らがこの地に踏みとどまり戦えば、皆生き残ることができます。この首都アルナスタリウムには商人以外にも鍛冶師や傭兵、冒険者など、戦える人間がいくらでもあります。彼らに十分

な援助をして、利を説いて協力してもらうのです。妖魔がやって来れば、彼らとて危ないのですから必ず手を貸してくれるでしょう。そして、各地の村落に使者を送れば、村人達も援軍となるべく集結するはず。我らが食糧や物資を運ばねば、やがて飢えて死ぬことになるのですから、必ずや馳せ参じるでしょう」

それは十分に可能性のある話だった。

人間と妖魔の憎しみ合いは昨日今日始まったことではないし、妖魔の軍勢がすぐそこに迫っていると聞いて怯えている者は少なくない。アルム自身が出向き、十分な利益を約束すれば、皆、武器を取って戦うだろう。

「必ず、私が説得してみせます」

「思い上がるなよ。若造が」

エルギスは声を低め、威嚇するように言った。

並の人間ならば萎縮してしまうほどの威厳があったが、アルムは真正面から受け止めて平然としている。それが気に食わなかったのか、エルギスはさらにネチネチと、アルムの提案を否定した。

「お前の呼びかけで鍛冶師や傭兵、冒険者が立ち上がり、それで勝てると思っているのか？ そんなことをしている間に、退路を塞がれたらどうする？ 村落からの援軍だとか？ 話にならない。まともな武器も防具も持たない村人が何万集まろうが、聖王国と連合諸国の軍勢を打ち破った妖魔

どもに勝てるとは思えん」

もつともらしいことを言っているが、老人の心中にあるのは保身のみだった。アルムの意見が正しいと認めてしまえば、今まで真つ向から反対していた自分の立場がなくなり、自分に従っていた商人達を引きつける求心力が失われる。

（この成り上がり者に、儼^{まじ}の地位が奪われるかもしれない）

そんな猜疑^{さいぎ}心に満ちた眼差^{まなざ}しを向けられながらも、アルムは何とか説得を試みようと言葉を続けた。

「武器や防具ならば、この都市にあるではありませんか。それを配り、武装させるのです。そして運河の迷路を使い、敵を囲むようにすれば、互角^{ごかく}以上に戦えます」

「武器をタダで配れと言うのか？ 我々は商人だぞ！ 金貨を捨てるようなマネがどうしてできようか？」

「命と金、どっちが大事なのですか！」

話し合いは終始、平行線を辿った。

「できるわけがない！ お前の言っていることは、すべて理想論だ」

「ですが、やらねば何万もの商人が殺され、その百倍の民が死ぬのですよ！」

商人達は、大商人二人の激論を静かに聞いていたが、やがてエルギス老師を支持する声が明らか

に多勢^{たせい}を占めていった。多くの商人、そして大商人にとって、村で生活する者達の行く末など知ったことではないのである。村人達の働きが巡り巡って自分達を豊かにしてくれるということを、頭では理解していても、実感している者などほとんどいない。

場の空気を讀んだエルギスは、自分を支持する商人達の思いを代弁する。

「そんなにこの都市を守りたいならば、お前だけで勝手にやるがよい」

それを受けて、アルムは口惜^{はが}しそうに齒^は噛みした。

「一丸となって事に当たらねば、勝ち目はなし、また意味もないのです。それがわかりにならないとは……」

その言葉を無視して、エルギスは会議室から立ち去っていく。

大商人達も我先にと彼につき従う。アルムの周囲に残った大商人は、片手で数えられるほどしかいなかった。

「アルム大商人、どういたしましょう」

残った一人が怯えた声で問いかけた。

「先ほどの俺の提言は、この都市の大商人すべてが協力することを前提としている。その前提が崩れたからには、別の策^{さく}を講^{こう}じるよりほかない」

「別の策とは？」

「それを話す前に、一つ聞きたい。お前達、この商業国家のために自分の命を捨てる覚悟はあるか？」

アルムの真剣な問いかけに、一同は顔を見合わせ、覚悟を決めたかのように頷いた。

「私達はアルム大商人が旗揚げした時から、その才覚に惚れこんでおります。そして同時に、この商業国家を愛する者であります」

「しかし真に情けないことですが、我らにはこの危機を乗り越えるだけの才覚はありません」

「ならば、命を懸けるよりほかにありますまい。覚悟はできました。どうか、ご指示を」

アルムよりも年下の者もいれば、年上の者もいた。

彼らは一様に頭を下げ、アルムの言葉を待つ。

「商業国家のため、ひいては大陸全土の人々のために、皆の命を使わせてもらう。無論、皆だけではない。俺の命も捨てる覚悟だ」

アルムはそう宣言した後、ある作戦を話した。

先ほどの作戦は、首都アルナスタリウムにとどまり、商業国家に住む民達の力を結集して妖魔達を迎え撃つというものであったが、今度は全く別の発想に基づくプランだ。すなわち、人と妖魔に共通する、ある望みを利用しようというのである。

アルムの作戦を聞き、大商人達は次第に青ざめていったが、誰一人として反対することはなく、

指示に従うことを誓い合った。

* * *

一方その頃、場所が変わって、ここは邪悪にして悪辣なる地下迷宮の第五階層である。

列強との戦により各地が荒れている中でも、地下迷宮にあるこの場所は、そんな状況を忘れさせるほど穏やかだった。それはもちろん、表面上にすぎない。地下の深層部からは各地に軍勢を派遣しており、情勢は一層苛烈さを増していたものの、一介の冒険者達にそのような事実までわかるわけがない。

今日も、命知らずの冒険者どもが迷宮に潜り、ある者は宝を見つけ、ある者は魔物の餌食になっている。地下迷宮の化身であるアルークは、彼ら冒険者の喜びや嘆きを感じとりながら、地下五階層へと足を運んでいた。

「悪魔を宿した者」の中でも殊に、死霊魔術に秀でた才覚を持つ「命を弄ぶ者」と呼ばれる少女達が、地下迷宮の番人を製作する現場での指導が目的である。

「死の製作室」と名付けられたその部屋の広さは、人間が三十人は入れるほど。壁と床はよく磨かれた大理石でできており、装飾用に剥製にされた黒山羊の頭がいくつも壁に掛けられている。

室内に居るのは暗緑色の鎧を身に着けた少女達だ。

アルアークが姿を見せると、少女達は一斉に跪いて臣下の礼を示した。

「これより、貴公らには地下迷宮を守る番人となる不死者を作り出してもらう。始める前に、何か質問はあるか？」

「はい、アルアーク様。実はシア様のお姿が見当たらないのです。どこに行かれたのかご存じではありませんか？」

少女の一人が不安そうに問いかけた。

「シアには特命を出した。しばらくは帰らない」

「危険な任務なのですか？」

「危険はない。使命を果たせば、ここにも顔を見せるだろう」

アルアークがそう答えると、少女はほっと安心した顔になった。

「では各々、準備は良いか？」

少女達は「はい」と返事をする。

「貴公らの思うように、番人を作成すると良い」

アルアークは続いて転移の魔法を唱え「死体保管所」から死体呼び出した。

腐敗し、悪臭を放つ亡骸。

城塞都市リゼンベルクの戦いで命を落とした、ロナン王国とベティア帝国の兵士の死体である。

手足が千切れたものや上半身や頭部だけの死体もあるので、はつきりとした数は不明だが、おおよそ十体くらいだろう。鎧や衣服は剥ぎ取られ、剥き出しになった肌には蛆が湧いている。

死体を見慣れない者であれば吐き気を催す光景に違いない。しかしアルアークも少女達も、いたって慣れたものだ。人の原型を留めぬ無残な姿も、鼻が曲がるほどの腐臭も、すでに人でなくなった彼らには、さして気にならない。

「複数の死体を繋ぎ合わせた屍魔導兵を作るのはどうかしら？」

「地下迷宮で運用するのだから、逃げる相手を追いつめる——飢えた食屍鬼が良いと思うけど……」

「攻撃的な不死者なら、彷徨える解体屋にするというのも捨てがたいわ」

「待つて。ここは死体に見合った不死者にするべきよ」

「命を弄ぶ者」の呼び名に相応しく、様々な意見が飛び交う。粘土をこねくり回すように、死体を弄りながら、どんなものを作ろうかと話し合っている。いささかなりと道徳心のある者ならば眉を顰めるところだ。

やがて意見がまとまったのか、少女達は声を揃えて、不死者を生み出す魔法を唱える。

「——屍法、墓所の守護者」

その魔法に応じて、少女達の体から緑色の焰が吹き上がった。焰は死体に巻き付き、失われた四

肢や半身を蘇らせる。かりそめの命が与えられた不死者の虚ろな眼窩に怪しげな光が灯った。すると不死者は呻き声を上げつつ、ゆっくりと体を起こす。

負の力を吸収し、何度でも再生復活する不死者の誕生である。

拠点防衛用に最適だと言えるだろう。

「何故それを選んだ？」

アルアークは問いかける。

「私達なりに、死者に対する敬意を示したのです。生前の彼らは守備兵のようでしたから、死後も同じ役職に就かせるべきだと考えました」

「命を弄ぶ者」は、死体に手を触れるだけで生前の記憶が読み取れる。その結果として、彼らにふさわしい役目を与えたのだった。

その悪徳に満ちた行いを「敬意の表明」と言う少女達の目はどこまでも純粹に輝き、アルアークの蒼い瞳をまっすぐ見返していた。

「すばらしい。それでこそ地下帝国の住民だ」

地下迷宮の支配者はそう称賛した。

少女達は慌てた様子で一礼する。

悪の種は芽吹き、すくすくと育っているらしい。無力だった少女達も、もはや何者にも犯される

恐れはないだろう。

そのことに満足しながら、アルアークは指示を下した。

「では、今から言う場所に、その不死者を番人として配置して来い」

時を同じくして、アルアークの妹ハルヴァーは、ロナン王国軍を相手に使ってしまった罠を再設置すべく、地下第二階層にいた。

「水晶玉を通して遠隔操作して設置するということでも良かったんだけどね。時間が許す限り、自分の目で見ながら修復したいんだ」

ハルヴァーが話しかけている相手は、**十貴族**の一員たる**高等悪魔崇拜者**、エプリスクランであった。

漆黒の髪を持つ美丈夫で、悪魔を使役する魔法と悪魔を身に宿す魔法に精通している人物だ。彼は常々、自分のことを子供の守護者と語っており、シアが死神に命を奪われそうになった時も、さっそうと駆けつけた。

ちなみにハルヴァーは美少女だが、エプリスクランにとってはギリギリ守備範囲外の年齢らしい。「ハルヴァー様が自らおみ足を運ばれ、領地の安寧にお力を尽くされるお姿に、配下である私のエプリスクランは、涙が溢れんばかりにございます」



あまりに仰々しい物言いに、ハルヴァーはややうんざりしたらしく、「もっと肩の力を抜きなよ」と言いつつ、手は早くも罾の補修に取りかかっていた。

ここを通行する敵を押し潰すための「転がる大岩」は、ほぼ使い尽くしてしまったので、新たに大岩を嵌め込む必要がある。角がとれて丸くなった大岩に破壊力を持たせ、勢いよく転がるように魔法を付与しなくてはならない。

壁の隙間から現れて敵の命を狩りとする「ふりこ式の大鎌」もあるが、その大鎌は血で錆びついていて。こちらに関しては「高等悪魔崇拝者」から手先の器用な悪魔を呼び出し、新品同然に磨くよう命じる。

本物の竜そっくりの唸り声を上げて敵を威圧する「偽竜」は、利口な冒険者に正体を見破られ破壊されたので、一から組み立て直す作業も必要だった。今度は壊されないように、触れた瞬間に感電する魔法の防護も忘れずに付与しておく。

「そう言えば、ユニーク・モンスターのロード種はどうしているのでしょうか？」
エプリスクランが訊いた。

ロード種とは、魔法帝国の貴族達の魂を素材に作り出された存在で、「十貴族」の祖先にあたる。そして、彼らは地下帝国の管理人でもあった。

「城塞都市リゼンベルクやロナン王国、それにベティア帝国の首都から、我が地下迷宮へ通じる道

をすべて迷宮にしようと思ってる。みんな、その作業に従事してもらっているよ」

ハルヴァーの言う通り、邪悪にして悪辣なる地下迷宮と各都市を結ぶ道は着々と迷宮化している。地下迷宮は、まるで蟻の巣のように大陸全土に広がっているのだ。大都市を丸々呑み込むほどのものではないが、ダンジョンとしては十分に機能する。

その点について、兄妹はこれまであまり目を向けてこなかったのだが、「せっかく作った道なのだから簡易であっても迷宮にすればいい」と、地下迷宮の管理人であるロード種を派遣することになったのだった。

「しかし何故、今そのようなことを？」

エプリスクランは首を傾げた。

すでにロナン王国やベティア帝国は滅んだも同然なのである。

今さら彼らの領地に地下迷宮を生み出しても、あまり旨みはない。

「それはもちろん、今後のためだよ」

ハルヴァーは大岩に魔力を付与しながら、そう答えた。

「聖王国を滅ぼした後、地下帝国の臣下に与える領地が必要でしょ？」

その臣下とは、凄まじい勢いで増え続ける妖魔達のことだ。

大自然の神秘を語る、^{ハイ・ドール}高等自然崇拜者、^{ハイ・ドール}コルストエルムによれば、あらゆる生き物は、総数が減

るに従い生まれる数が増え、総数が増えれば生まれる数は減る。

とはいえ、ハルヴァーには実際にそうなるかどうかわからない。

だから、増え続ける彼らを受け入れられるように領土を拡大しているのだ。

幸い、妖魔の多くは深い地の底でも生活できる。プルックは地上で生きていきたいようであったが、戦いが終わって妖魔の数が減る心配がなくなれば、あるいは^{ハイ・ドール}高等自然崇拜者、^{ハイ・ドール}コルストエルの予想が外れたとしたら、再び領土を巡る争いが起こるだろう。

「まあ、役に立たなかったら、役に立たなかったでいいけどね」

ハルヴァーは笑って言う。地底が迷宮になっていようと、地上に影響がなければ困る者はいないはずだ、と。

アルークとハルヴァーの復讐心は、今は世界を蝕む猛毒だが、復讐が果たされた後は、それも無害な存在となる。

よって、地下迷宮に住み着くのもよいだろうし、目障りだったら埋め立てればよい、と。

「そんなことよりも、罫の修復は終わったかな？」

「はい」

^{ハイ・デモニスト}高等悪魔崇拜者、エプリスクランは頷いた。

彼が呼び出した小悪魔達の手により「^{ベンジュラム・オブ・デス}ふりこ式の大鎌」の刃は新品同然に輝いている。

「それじゃあ、次に行こうか」

広大な地下迷宮には、まだまだ数多くの罠があるのだ。

さすがにそのすべてに直接手入れをするのは難しいが、ハルヴァーはできる限り自らの手で修復しておきたかった。

多くの命を奪ってきた罠であり、彼女の罪の証でもあるのだから。

それが風化することのないように、彼女は精魂込めて、罠の修復を行うのであった。

この世の悪が絶えることがないようにと願いながら。

* * *

黄金都市アルナスタリウムまで、あと少しというところまで迫った妖魔の軍勢。

血気盛んな妖魔達は頻繁に斥候を出し、どうやって黄金都市を蹂躪しようかと考えを巡らせていた。そんな中でプルックだけは苦い顔をして、アルアークへの伝令に遣わせた息子が戻ってくるのを待ちわびている。

しかし、伝令の帰還より先に、商業都市から使いの者が訪れた。

「使者だ？」

「へい、数十人ほどで、酒や家畜を持ってきました」

プルックは額に皺を寄せながら、配下に命令を下す。

「罠かもしれない。敵兵が隠れていないか、四方八方に偵察兵を出せ」

「了解しました。使者は血祭にして、我が軍の士気を高めるのに使いますか？」

「いや、まずは話を聞こう。その上で、どうするかを判断する」

プルックはそう言うと、使者が暗殺者に変じた場合に備え、身代わりを用意した。

プルックに背格好の似ているゴブリンに王冠を被せ、それらしい衣装を着せてやる。こうすれば、人間には見抜けない。プルックはこう考えて、自分は護衛兵の武具を着用し、身代わりの隣に立つことにした。

これならば相手の姿を間近に見られるし、配下の者に指示を出すこともできる。

「いいか、俺の言ったことをそのまま伝えるんだぞ」

「へい、大族長のお言葉を伝えます」

プルックの命に従うと、身代わりは素直に返事をする。

そのほか細かい点を打ち合わせているうちに、商業国家の使者が姿を現した。
大商人アルムと、彼につき従う商人達である。

（戦士ではないな。さほど威圧感はない）